



## ■ 第17回都草講演会「京都の皇室と王朝文化の歴史に学ぶ」



1月18日(日曜日)京都府立京都学・歴彩館において「京都の皇室と王朝文化の歴史に学ぶ」というテーマで、京都産業大学教授の久禮旦雄(くれあさお)先生の講演会が行われました。

第一部は「平安京の天皇と王朝文化の誕生」というテーマで桓武天皇による平安京遷都から始まりました。まずは延暦寺にある桓武天皇像は椅子も服装も中国風であるのはなぜかを、天皇の系図や資料で説明されました。その後平安京を安定・確立されたのは嵯峨天皇の業績といわれ、宮中儀礼が唐風化されました。この時期は「国風暗黒時代」といわれていますが、実は文化の水準を高めた時代だったそうです。

その後の宇多天皇の時代には宮中儀礼の再編がなされ、天皇・貴族を中心とした王朝文化が発展していったとのことでした。

第二部は「京都の天皇と王朝文化の復興」として現在までつながる話です。

江戸時代、後水尾天皇は譲位後も四代の天皇に渡って院政を敷かれました。その間幕府により『禁中並公家諸法度』が制定され、徳川和子の女御としての入内により、潤沢な幕府の援助で寛永文化が形成されました。その後、光格天皇までに天皇を中心とした王朝文化が徐々に復興されていきました。この復興には松平定信と、裏松光世(固禪)や本居宣長など近世の学者たちの尊皇思想の力が大きかったと知りました。明快な言葉や具体的な例で、京都の王朝文化の誕生と復興について勉強になりました。約200名の参加者があり、しかも大好評でホッとしました。(理事 相場 まり子)

## ■ 第44回文化交流部会「老舗の技と粋に触れる—細辻伊兵衛美術館見学会」



3月18日(水)、手ぬぐい美術館の「細辻伊兵衛美術館」で、手ぬぐいの展示や歴史などを見学し、ポケットティッシュの包み方を体験しました。この美術館は、日本最古の綿布商として410年の歴史を持つ永樂屋が運営しています。永樂屋は、織田信長の御用商人だった初代が屋号と「細辻」の姓を拝領して創業し、現在の十四代に至るまで商いを続けている大変歴史のある老舗です。

まずは包み方の体験です。同美術館では、チケットが手ぬぐいになっているため、各自がその手ぬぐいを使用し、学芸員の方の指導を受けながら順番に折り畳んでいくと、約90cmの長さの手ぬぐいがポケットティッシュの収まるカバーに変身。手ぬぐいは手や体を拭くだけではなく、色々な物を包める優れたものだったと気づかされて新鮮でした。

その後、手ぬぐいの製造工程を伝統技法の型友禅染めを中心に説明を受けながら見学。細辻伊兵衛歴代の功績を示す資料の展示では、食器や婚礼道具、書簡、写真など貴重なものばかりで見応え十分でした。膨大なコレクションの中から現在開催中の「イケメンテヌグイ展(6/3迄)」も鑑賞。映画「国宝」人気も意識して歌舞伎役者をモチーフとした昭和初期の作品なども数多く展示されていました。手ぬぐいは、最近のサウナブームで、タオルより速乾性がありコンパクトと見直されているそうです。実用性だけでなく、文化的・歴史的価値や芸術性に優れた手ぬぐいの持つ奥深い世界を知った一日でした。(会員 松村 千恵子)

## ■ 「国宝 琵琶湖疏水」の動画をYouTube で公開



映像制作プロジェクトでは、1月に第13回「国宝 琵琶湖疏水」の動画をYouTube で公開しました。

昨年5月、国の文化審議会において、琵琶湖疏水の諸施設のうち24か所を重要文化財に、そのうち3つのトンネル、蹴上インクライン、南禅寺水路閣の5か所を国宝に指定する答申が出され、8月に官報で告示されました。重要文化財には、蹴上の旧御所水道ポンプ室、本願寺水道水源池などが含まれています。西洋技術の習得過程にあった明治中期に

おいて、当時の土木技術の粋を集めて築かれ、世界的に高い評価を得た類い希なる構造物であり、明治日本における都市基盤施設の金字塔である、と高く評価されたものです。

琵琶湖疏水は、第3代京都府知事北垣国道が、明治維新で人口が減り衰退した京都を復興させようと、若き技術者田邊朔郎を登用して成し遂げた壮大なプロジェクトでした。そしてそれは、現在も現役の施設です。明治45年に開通した第2疏水と合わせ、京都市の上水道の水源は99%が琵琶湖疏水です。また、蹴上周辺に点在する庭園の多くは琵琶湖疏水の水を活用、南禅寺界わい別荘群と呼ばれ、観光名所になっています。

今回の動画作成では、京都市上下水道局の協力を得て、過去の貴重な写真、映像を使用することができました。艀（ろ）をこぎながら疏水を運行する船、その船を載せてインクラインを上下する台車、第1期蹴上発電所など、今は見ることができない当時の様子をご紹介します。

映像制作プロジェクトでは、これからも都草らしい独自の視点から動画を製作していく予定です。次回もご期待ください。(会員 須田 信夫)

## ■ 京都高齢者大学校 ぶらり京都のまちあるき



「川中に浮かんでいた淀のまちをブラタモリ」という一風変わったタイトルを掲げ、2月13日と26日、両日も好天に恵まれたなかで、ガイドを務めました。

淀は、「よどむ」が語源の通り、古くは巨椋池と三本の川の狭間に臨む水運拠点として発展を遂げます。ところが、豊臣秀吉が天下を取った以降、宇治川の付け替え等の要因がもとで街が衰退してしまいます。その後、徳川時代の淀城築城を契機として、城下町や宿場町として繁栄していきました。時が流れ、現在は、郊外の住宅地になっています。

これらの歴史的変遷を、頭の中でイメージしてもらいながら、「ゲーム感覚」で街歩きを体感していただきました。参加者は、手元の「淀城と近郊絵図」を上下左右して、現在地と見比べながら、「えっ？ ここはもともと川底やんか！(笑)」 「徳川時代と豊臣時代の淀城って全然違うこと知らなかった！」「昔の中州が、今は住宅街になってんねんや！」「京都競馬場は、巨椋池の跡地やったんや！」と、ワイワイお話ししながら、笑顔で旧街道を歩く姿は、とても楽しそうでした。

当初は、参加者の感性に頼りながらの案内なので、どうなることやらと心配をしていましたが、取り越し苦労でした。非常に勉強になりました。ありがとうございました。(会員 木下 晃)